大自然の中で，地球の詩を歌おう
北の大地で通年の月例自然体験塾を実践して

三 浦 国 彦
旭川聖園中学校教諭

Theme "Sing the poem of the earth in Nature"

KUNIHIKO MIURA
Teacher Asahikawa Seien Junior High School

"Sing the poem of the earth in Nature." is the slogan of Green Forum Asahikawa (GFA). A conservation group called "Nature Conservation Society Mt. Daisetsu and the Ishikari" is responsible for GFA. GFA is a field work school for elementaly shcool pupils. It has now 226 members. They are playing and or studying about nature in the field once a month. Here in Asahikawa, coverd with snow more than five month a year, the children are so active to go outside even under −20℃. Some members grow salmons fertilized eggs to fries in their own houses during winter. Those small salmons are stocked in the Ishikari river by all the members at the biginning of the spring every year. GFA has a problem that all the applicants are hardly accepted because of the limited staff.

In the spring of 1991, another private field work school "Earthian club Asahikawa (ECA)" will be founded here. In this club, the parents who are interested in the environmental education will be members themselves and educate and support their children cooperatively, unlike GFA without parents members. We plan ECA members, including their families not only to do field work but grow salmons, raise vegetables, plant trees and clean up the environment as part of the global network of other field education groups.

KEY WORD : NICE NATURE NETWORK

Ⅰ．はじめに〜環境破壊のサイン

地球46億年の歴史の中で生みだされ，自然の申し子である私たち人間が，その母体である地球環境をなし崩しに損ない続けてきた。恐ろしいのは，私たちの生活の舞台に環境破壊のサインが発せられていても，それとは気づけない多くの人間の意識である。

私の生活の舞台である旭川市では，秋の風物詩として，母なる石狩川に遡上する鮭の大群の姿があった。1955年，下流の深川市に魚道もない農業用ダム（花園頭首工）ができ，鮭の姿が忽然と消失したが，これを環境破壊のサインと受け止める市民はいなかった。

ゆき過ぎた物質文明の洪水の中で子どもたちの心が歪み，教育環境の荒廃に狼狽し，人々は人間の心身の発達が自然環境に大きく依拠していることに気づきはじめた。プールでの「水泳」ではない天然の川遊びの大切さや，テレビの「映像」ではない木や鳥や，魚や虫たちとの触れ合いこそが，人間の教育には不可欠なのだと思いはじめた。

安全第一を大義名分とする学校現場にも，文部省の肝入りながら，野外教育活動としての"自然教室"が徐々に普及しつつある。一方，夏休みに

なれば，民間主催のさまざまなサバイバル体験を売り物にした“冒険学校”が全国各地で行なわれ，それらがブームにすらなっている。本当のところ，年に一度のサバイバル体験で子どもの自然認識が育つとは誰も考えてはいない。それでもなお，学校や家庭では行なえない自然体験を，民間の冒険学校に求めざるをえないところに，今日的な自然環境や教育環境の危機を感ずる。

Ⅱ．グリーン・フォーラム旭川とは何か

グリーン・フォーラム旭川（GFA）は小学生のための民間の野外教育団体で，年間延べ12回の自然教室を行なう自然体験塾である。夏と冬の長期休業には，宿泊を伴う探検教室も行なっている。全国的にも珍しいこの活動は年々充実を重ねながら8年目を迎える。GFAの生みの親は自然保護団体“大雪と石狩の自然を守る会”である。GFAの下級生も上級生もここでは対等である。下級生は夢中で追随している過程で大きく成長し，上級生は下級生の世話をしながら包容力を身につけ，リーダーとしての自信を深めてゆく。

GFAの会員は現在226名に達し，多いときには貸切バスを3台連ねることもある。大自然を求めて郊外にでかける時，バスは必要不可欠な足であり，これから踏み込む自然の魅力やしくみについて指導者の話を聞いたり，仲間との楽しい交流ができる便利な移動教室でもある。バスには定員があるので，事前の参加予約をとることも大切な仕事になる。毎月1回の例会とはいっても，スタッフにしてみれば，予備調査，行事の案内，参加者の確認，事前学習会の準備などが30日周期で押し寄せ，気が抜けない。

5年前までのやり方は，まず会員へ葉書で例会の案内，電話予約の受け付け，定員になり次第の締切り，当日バスでの移動教室，現地での自然体験という流れの，場当りスタイルでやっていた。ここ数年，入会手続きとして，会員自身が自分への宛名をかいた葉書12枚と，同じように宛名を書いて62円切手をはった封筒6枚の提出を義務づけている。この方式の採用で，スタッフは宛名書きという重労働や，連絡漏れという最悪のミスから開放された。しかし，これだけでは親との意志の疎通を欠くし，理解も深まらない。

1989年から“自然教室”と“親子フォーラム”と名づけた親子学習会をセットにして運営している。『魚の教室』で水族館に行くとすれば，教室が行なわれる日曜日から6日前の月曜の18時から親子フォーラムを実施し，海の生物についての学習をする。テキストが配られ，スライドやビデオを視聴し，親子がいっしょに勉強をする。この日は，参加の受付け，参加費の徴収，スタッフの紹介，実施要領の説明なども大切な仕事になる。

親子フォーラムの実施で，親の自然認識や環境問題への意識が大いに高まり，関心や自信が深まり，自然や遊びについての親子の対話が広がったという体験が多くの親から報告されている。子どもが自然体験で身につけた知恵が，その機会だけに終らず，成長の段階に応じて，親子の対話が幾度も積み重なり，驚くほど自然認識が拡がってゆく。これまで学習塾かボーイスカウトにでも預けるような気分でGFAに入会させた親でも，子どもの変貌する姿を見て，GFAの本来のねらいや願いを理解するようになる。

例年，会員は公募をしないうちに満員になる。継続する子どもが半数を越え，しかも兄弟姉妹や友人の入会を推薦してくるので，外部に宣伝する余地はない。定員を増やしてはきたがこれが限界で，入会希望者を断わらねばならぬジレンマは常につきまとう。私たちの活動を誇りに思う一方で，手の届く範囲を撫でまわすもどかしさを整理できない。

Ⅲ．5年生の壁を突き破れ

GFAの対象は，小学1年生から中学生までである。中学生や高校生の入会希望者はリーダーとして登録され，指導者の補佐役にまわる。GFA父母会も強化され，多くの親が運営委員として活動し，自然教室では手薄なスタッフをサポートする親も増えてきた。ただ，親の参加の原則は「自分の子どもに干渉するな，他の子の世話をやけ」である。

親の中には一年間の体験で充分だとの考え方

や，じっくり年月をかけて育てたいとの考え方もある。小学校低学年から中学生まで何年も継続する子もいるのには驚かされる。私の股の下をくぐっていた子が，数年のうちに眩しいほどのリーダーに成長する。

一方では，“5年生の壁”という難関がある。この学年からクラブ活動や塾通いで去らざるをえない子どもが増え，上級生の会員数が低落するというジンクスをなかなか破れない。やがて受験戦争に突入するわが子なら，せめて低学年のうちだけでも思いっきり遊ばせてやりたいとの親心だろうか。知育偏重の教育体系の歪みがここにも顔を出す。今年は4年生の親への啓蒙を意識して“5年生の壁”に挑戦する。撒かぬ種は生えないが“撒いた種はいつかは必ず芽を出す”という展望にたってスタッフは頑張り続けている。

Ⅳ．GFA，その進化の布石

GFAが創設以来，年々進化し続けてきたのには伏線がある。大雪と石狩の自然を守る会では自然認識を鍛える教育学習運動の一環として，市民のための自然観察会を15年以上も続けてきた。はじめた数年間はその都度募集の単発型で，参加者が目まぐるしく入れ替わった。1981年から固定会員制に踏み切り，年間5講座を開設した。愛称“ひぐま大学”と名づけられた市民対象の自然学園は，今年で10周年を迎える。私は創設から5年間，責任者として精魂を傾け，その後もGFAの仕事と並行させて講義やテキスト作成などに携わった。それまでの科学教育運動の中で培った私自身の自然観や自然史の知識を，市民のフィールドワークにどのように生かすかという課題を抱えて東奔西走した。

市民対象のひぐま大学だけでなく，21世紀を担う子どもたちにこそ自然体験が必要であるとの論議が高まり，1984年から，これも単発型の“ちびっ子探検学校”を固定会員制に改めた自然体験塾“グリーン・フォーラム旭川”を誕生させた。新生GFAの活動形態は通年制ではなく，ひぐま大学と同様，春から秋にかけての年間5講座から出発している。

日本を代表する大型哺乳動物のエゾヒグマは，雪が降るまでの間にたっぷりと養分を貯え，丸々と太って冬眠に入る。ひぐま大学もGFAも雪が降るまでの間の活動だから，ヒグマ型だと言ってもよい。

北海道を代表する小型哺乳動物のエゾリスは，秋にはフサフサとした冬毛に変り，雪深い森を元気に走りまわっている。GFAの子どもたちもエゾリスのように四季を通して元気に活動させたい。この思いは，冬期間，家庭でのサケの卵の孵化とそれに引き続く稚魚の飼育観察という形で，夏と冬の活動を繋ぐことはできた。

根雪が近づく11月にサケの発眼卵を配布し，各家庭や希望する学級に飼育を依頼する。12月には劇的な孵化が始まり，1月には巧みに泳ぎ始め，2月には餌を争って食べるようになる。そして春3月，稚魚の出発式を盛大に行なう。4年後のサケたちの無事回帰を願い，アイヌの人たちの協力を得てカムイノミ（祈りの儀式）を挙げ，各家庭や学校で飼われてきたサケの稚魚約3,000匹を一堂に集めて，仲良く石狩川に放流する。

21世紀の北方圏の生活を切り拓く子どもたちには，冬の厳しさと闘って生きぬく動物の元気な姿や，冬を耐えて春の芽生えにそなえる植物の姿を学ばせたい。何よりも子どもたち自身に冬の自然を体験させなければならない。この通年制活動への願いが，1989年からGFA父母会の充実という背景を土壌にして実現したのである。

Ⅴ．フィールドワーク実践上の要点

一つのフィールドワークを計画し，それを成功させるためには，実行しなければならない幾つかの要点がある。GFAの経験で試されたKnow Howのいくつかを略述する。

ⓐ フィールドワークの事前には，スタッフで必ず予察を行なう。

コースの設定のためには，必ず予察（事前調査）を行なう。コースの中に“感動のポイント”を発見し，そこで「何を見せ」「何を知ってもらうか」を十分討議する。ポイントを中心にミニテキストを作るが，これらのねらいが曖昧なら，成功

はおぼつかない。例会が盛り上がりを欠けば，スタッフの意気消沈を招き，ボランティア活動は長続きしない。

ⓑ 予察をベースに必ずフィールドワークの“事前学習会”を行なう。

自然の中に踏み入る前に事前学習会を組織する。ここでは，学習者に感動の条件としてフィールドの見所（視点）やとらえ方（観点）を学ばせる。出合いが予想される動植物や地形，時には化石などの魅力的な知識や，ウオッチングの楽しみ方を伝授する。

ⓒ 予察のとき，コースに添ってスライドやビデオによる映像資料を収めておく。

これら映像は事前学習会だけでなく，別に行なう催しなどにも威力を発揮する。フィールドワークの初心者は，未知の自然に対する漠然とした恐れや不安も抱いている。これらを期待と安心に変えるには，映像資料や指導者の体験談が大変に有効であった。

ⓓ テキストは必ず作成し，事前学習会や当日の手引きとする。

テキストには感動のポイントの解説や図説を簡単に示す。素朴でも毎回発行することが大切である。GFAではB４版の西洋紙１枚をB７版大の８つに折り畳み，感動ポイントを７点に示したミニテキストをつくる。子どもたちは屏風のように折り畳んで，ポケットに携行する。大きく開いた裏面には，ルートマップやタイムテーブルを示しておく。

ⓔ 学習の柱には，生態学や自然史の観点を据えて展開する。

事前学習会がなかった時期には「これは何という名前ですか」式の直接型の質問に辟易した。目に触れたものを「これなあに」と尋ねる発想は幼児と同じ水準だが，第一，名前を知って感動することはほとんどあり得ない。「ナキウサギは，氷期に海水面が下がり，北海道が大陸と陸続きになって，千島やシベリアから歩いて渡ってきた」とか，「ウスバキチョウはコマクサしか食べず，１年目は卵で越冬，２年目は蛹で越冬，３年目でやっと親になれる」などの説明は，生態や生活史に根ざした知識だからこそ感動を生む。

ⓕ 森，山，川，海，土，生物などを常に一つの環境としてとらえ啓蒙する。

標本の生物でも，これを生き生きと取り上げることが大切である。博物館でシマフクロウの剝製に出会った時，名前の説明だけで済ませたくない。一歩踏み込んで，シマフクロウが絶滅しかけている原因は，森の破壊によって土が剝ぎ取られ，土石の流入によって川が荒れ，海と川を往来するサケやマスなどの魚もいなくなり，それらを食べ物にしていたシマフクロウが生活環境を失ったことなどを分かりやすく問題提起したい。

ⓖ フィールドワークの後は感想文を求め，必ず記録文集にして残しておく。

子どもたちの感性の鋭さや豊かさには驚かされる。良い指導は良い感想文を生み，良い感想文が指導者のレベルを向上させる。感想記録文や，自然体験のビデオ映像からの写真などで綴ったGFA記録文集『イララ・エカッチ』（B５版104ページ）には，子どもたちの豊かな感性が溢れかえっていて見飽きない。書名はアイヌ語の餓鬼大将に由来している。

ⓗ 活動ぶりをビデオに記録し，次回の事前学習会などで視聴させる。

貴重な体験になればなるほど反芻が大切である。客観的な映像を通して，自分自身の思いがけない躍動ぶりや，仲間のお手柄の数々がモンタージュされ，その集団の質が飛躍する。親子フォーラムでは，例会ごとの制作ビデオを視聴するが，子どもたちの言動が親によっても追体験され，そこから親と子の質の高い対話が生みだされる。具体的には，展示発表会場で上映中の自作ビデオ“G-FAの四季”（30分）を視聴願いたい。

Ⅵ．今，求められている環境教育とは

日本環境教育学会が設立され，そのシンポジュウムに提言する場を与えられたのを機会に，私たちの実践を根本から問い直してみた。GFAなど民間の自然体験塾の実践は，日本の環境教育のどの部分を担っていくのだろうか。８年以上の歴史を持ち，226名の会員を抱えているとはいえ，自

然保護団体の教育学習運動の枠の中で，定員を設け，担当のスタッフがやれるだけ精一杯やって，それなりに満足していてよいのか，或いは，このような運動が旭川という一地域に埋没していてよいのかなどの悩みが常につきまとう。

私は，自然保護運動から自由に一歩踏み出し，環境教育の裾野の拡大を活動の中心に据え，自然体験塾を目玉とする親子の環境教育団体を1991年春から始動させる。『北の大地から地球（terra）へ』をスローガンとする，“Earthian Club Asahikawa (ECA)”の誕生である。これまで，GFAの啓蒙説明をしても大雪と石狩の自然を守る会のような自然保護団体がない地域ではこういう実践は難しいとする先入観が壁となっていた。

ECAを成功させれば，教育機関や自然保護団体等の後援がなくても，わが子に本物の自然体験をさせたいと願う親や，野外教育の経験者が何人かいれば，全国どこででも市民レベルの実践が可能なことを証明できる。旭川市にGFAやECAという，個性的な2つの自然体験塾ができれば，近隣の市町村に投げかける波紋も少なくないだろう。

近隣の士別市立博物館では，少年自然教室“Junior Naturalist Club”を主催している。ここでは4月から11月まで年間8回もの自然教室を実践している。ECAでは早速1991年度からのネットワークを結んだ。各地域での活動でも，グローバルなネットワークで展開されるようになれば，環境教育にとっても大きな役割を果たし得るだろう。

GFAは子どもが会員だが，ECAでは親そのものが会員である。自分たちがオーナーであり，スポンサーである。親の意識は「協力します」から「実践します」を指向する。その上で経験者の援助を得て，自分たちの子どもの自然・環境教育を行なうことになる。ECAの目的は子どもの自然体験塾の実施の他に，ECA家族のネットワークのもとに家庭で実践できる環境教育を並行させた次のようなプログラムを考えている。

① 家族ぐるみの飼育・観察活動　特に冬場は鮭の飼育に力を入れる。三月に稚魚を放流した後は，それぞれの家族がユニークな水槽飼育を行ない，情報を交流しあう。

② ECAファームで作物を栽培　郊外に共同で畑を借り，有機農法を取り入れ，地中に糞分を貯える作物の共同栽培と，家族の個別栽培を並行させた栽培活動をする。

③ ECAの森にみんなで植林　営林支局の協力を得て，人類最大の課題ともいうべき植林に取り組む。時折，家族で植林地へ成長を確かめにでかけ，森林への関心を高める。

④ 地球にやさしい環境浄化実践網　ECAのネットワークで，家族ぐるみの環境浄化運動に取り組む。再生紙の利用，リサイクル，ゴミの徹底減量，合成洗剤の不買，水や電気の節約，お父さんの禁煙など，どうしてそれが環境を守ることにつながるかを研究しながら，地球人（Earthian）としての視野と自覚を磨き，運動の輪を広げてゆく。

Ⅶ．おわりに〜北の大地の地球人として

「大自然の中で，地球の詩を歌おう」を合言葉に充実を続けてきたGFAの活動内容から，「北の大地から地球へ」を合言葉に1991年春に誕生するECAの活動理念まで，環境教育の中のとりわけ民間の野外教育の実践について述べてきた。

1989年度のGFAの実践は，GFAの三つの宝に具体的に再現されている。感動のポイントのKnow Howは『ミニテキスト』に，子どもたちの躍動する豆博士ぶりは自作ビデオ『GFAの四季'89−90』に，子どもの自然賛歌は記録文集『イララ・エカッチ』に表現されているので参照頂きたい。

1991年度のＥＣＡの実践は，前評判も上々で，親会員100名とその子供たちのＥＣＡ塾生140名が決まり，順調なスタートを切った。ＥＣＡの活動は学習研究社「５年の学習」への掲載が決まり，“北の大地の地球人”と題して，毎月10ページを割いた一年間の連載が始まった。

ＥＣＡでは子供の自然教育を充実させながら，親自身の21世紀に向けたライフスタイルの価値観作りを模索する家族ぐるみの環境教育をも創造しようとしている。東京発ではない，旭川発の自然教育の教科書づくりが急務となった。

一方，ECA の1991年度の月例行事である“自然遊泳”のプログラムは，次の表に示した通りである。

月	1991自然遊泳	活動の場所
4	春にかがやく野生	嵐山自然公園
5	北の海の生きもの	小樽水族館と海
6	恐竜時代をさぐる	桂沢上流の谷川
7	川と森の昆虫たち	美瑛町自然の森
8	夏の離島の探検隊	礼文島３泊縦走
9	火山と高山の植物	十勝岳連峰
10	秋の山と森の味覚	行先秘密ミラクルバス
11	落葉のしたの世界	神居古潭河畔林
12	北からきた鳥たち	神居古潭を歩く
1	雪の世界を楽しむ	山に１泊スキー
2	冬の動物園の探検	冬の旭山動物園
3	春を待つ雪のした	嵐山自然公園

地球温暖化の21世紀は，人類の存亡をかけた厳しい試練の時代になる。その中で，北方圏は食糧生産や生活の舞台としていよいよ重視されることになろう。

子らには『北の大地の地球人（earthian)』として，自然や環境の問題に楽しく真剣に取り組ませながら，強く生き抜く芽を膨らませて行きたい。ここは，ECA の緻密でグローバルな実践あるのみである。

《論文要旨》

“大自然の中で，地球の詩を歌おう”は，小学生のための自然体験塾“Green Forum Asahikawa (GFA)”のスローガンである。GFA は会員が226名，毎月１回の自然体験教室を行なっている。北海道は一年のうちの５ヶ月間は雪に覆われるが，子どもたちは冬の自然にも元気に飛びこんで行く。また冬は，自然体験のほかに，家庭で鮭の卵を孵化させ，稚魚を飼育し，春にはみんなで石狩川に放流する。GFAを主催しているのは，自然保護団体“大雪と石狩の自然を守る会（Nature Concervation Society Mt. Daisetsu and The Ishikari）”である。多様な活動を展開するこの団体も，スタッフだけでは，限界を遥かに越える入会希望者に応じ切れない悩みを抱えている。

旭川市には1991年春，もう一つの自然体験塾“Earthian Club Asahikawa (ECA)”が誕生する。環境教育に関心の深い親たちが会員となり，共同で運営して自分の子どもたちに環境教育を施そうというものである。GFA は子どもが会員だが，ECA は親が会員であり，子どもの自然体験塾のスポンサー兼オーナーとなる。自然体験塾のほかに，環境浄化や植林や飼育栽培などの取り組みを，家族はもちろん，他の野外教育団体ともネットワークを組み，地球人の視野にたって展開しようというものである。